

丹羽氏による棚倉築城について

正会員 ○ 古川敏夫

—築城の概要と経緯—

1. はじめに

近世陸奥国棚倉藩は丹羽氏による経営から始まる。前領主の立花宗茂は元和6年(1620)に筑後柳川へ転封をしていたことで、領主不在の状態であったが、元和8年(1622)正月に常州江戸崎藩主丹羽長重が3万石加増の5万石で棚倉へ就封した。その後、寛永4年(1627)正月には隣国白河へ5万石加増の10万石で再封しており、棚倉での在城期間は5年間である。丹羽氏は寛永元年(1624)から寛永3年(1626)12月までの間に城下町の基盤整備と本城の新規普請をしており、本稿では丹羽氏の棚倉城地選定ならびに築城の経緯について検討をし、若干の考察をしたい。

2. 棚倉城地選定の経緯

棚倉地方は近世より水戸道と奥州道の中継地点にあり、磐城浜街道や那須道ともつながり交通の要衝である。阿武隈山系南端と八溝山系に挟まれた久慈川上流沿いの山間部にあり、中世には奥州高野郡と呼ばれた。この地域は早くから都々古別神社が二つの八槻修験土豪組織を作って支配し、それぞれ南郷八槻近津宮と北郷馬場近津大明神に分かれていた。丹羽氏入部前、北郷の都々古別神社は馬場別当不動院として別当職の高松氏が管轄していたが、丹羽氏は棚倉城地を立地の上から馬場近津宮神域と決定した。長重年譜には「御奉書写」として、

一、長重公棚倉赤楯城寛永元年御普請御願ニ付公許之御奉書二通左之通尤 家光公御治政也

赤楯之城普請被仕度旨申上候処可然思召候間可被仰付候 恐々謹言 寛永元年九月十二日

一、赤楯之絵図被露仕候処普請儀尤思召候併先能々見分候而手間も不入所に弥可然地在之歟彼地江被能越具に被見立重而可有言上旨被仰出候 恐々謹言 九月二十一日

とあり、当時棚倉赤楯城と呼称されていたことが判る。また、「東白河郡史」には、

長重、案を換え、計を革むる数次、地を近津明神の境に相す、神霊の鎮まる處、事苟くも為すべからず、即ち、城西絶塵の浄丘を擇み、奉遷の儀を行ひ、後、城を築く

と築城の経過を記し、「正保城絵図」には古城(赤楯城)より10町南(本丸多門まで)に平城を築いたと見える。

城地の選定に際し、幾度か城絵図を描き幕府と協議の上、慎重に進めていったことが伺える。

丹羽氏の選んだ馬場近津宮とは、どのような場所であったかは別当高松氏の「家系明細録」に、

大職冠鎌足二十二代苗裔伊賀国守護職伊賀弥太郎左衛門亮藤原隆定父子は・・・当国下向のとき、当家別当老衰によりて社務なりがたし。・・・嫡男左門十三歳を迎えて養子となして、赤館城南馬場の居城を家督して、馬場大先達と号す。・・・父隆定、馬場左衛門亮と改め、軍事を務め、次男定澄赤館城主として・・・康正(康永二年か)二年軍役鎌倉將軍足利尊氏公の嚴命により、別当父子一族出陣従軍す。

とあり、明細録にある〈赤館城南馬場の居城〉とは近津明神社地と言えよう。また、高松良廣家記には、

寛永元年甲子依大將軍秀忠公上意、棚倉へ可築城郭旨、尤当社地要害宜由被見立、丹羽長重公を以て新地御引替の義被仰出、凡雖中興八百年余鎮座之地也。重き公命難黙止、良忠(可汲云、良篤の子、当時の不動院なり)及御請社地一山当家上下の屋敷地共に御城に差上、今の地に再遷座也。云々

とあることから、「御奉書写」にある〈手間も不入所に弥可然地〉と「高松良廣家記」の〈当社地要害宜由被見立〉が棚倉城地選定の決定理由であろう。すなわち、すでに八槻修験土豪組織の馬場大先達と号し、赤館城南馬場の居城地を構えていた程であるから、環壕を巡らす堅固な城構えであり、この地を新城とするには築城費用が掛からず短期間で完成させることが可能であったのである。宮地召上げに伴う「代替地検地帳」には、

宮中の替地大縄ニ而相渡候分

一、壹町三反六畝七歩八本宮分

一、貳町四反七畝拾九歩八別当屋敷并社人衆屋敷ニ

一、壱町四反七畝八歩八別当下屋敷島之替地

一、八反八畝拾貳歩八上津寺屋敷并門前共ニ

右四口合六町壱反九畝貳拾六歩

寛永元年十月廿日

とあり、さらに丹羽氏は知行10石を寄進し、「角田氏文書」には、

当郡馬場近津明神先代より御神領之外、從我等知行拾石寄進候。云々 寛永元年

とあることから、馬場近津宮の旧社地の広さは6町1反9畝26歩であり、約18,596坪(61,462㎡)となり、現況の棚倉城跡の本丸、同土橋、同掘部分を含めた求積が約14,642坪(48,395㎡)であるので、およそ本丸水掘の外周部分を含めた程の広さと言えよう。

3. 棚倉築城の経緯

築城の普請の様子については「高松良廣家記」に続けて、

冬十月廿三日御仮殿他御遷座石壁、水掘出来、同二年丑正月十五日当社普請初め、三月二十九日再建立令成就、同年五月七日大遷宮也、本願高松加兵衛良篤別而精勤在之、御城八同正月十六日普請初也、因之城名ヲ号近津城、石造営普請ノ入目八公儀ヨリ御下知不残長重ヨリ被差出候事

とあり、寛永二年五月七日「御遷宮棟札写」には、

遷宮導師小野末葉上津寺六代目住寺法印宥照勉之

本願高松加兵衛尉藤原朝臣良篤 当別当親父

・・・

寛永貳年乙丑五月七日

とある。記録から築城のあらましを記すと、

元和8年(1622)	正月11日	丹羽長重5万石で棚倉就封
寛永元年(1624)	9月12日	築城公許
	9月21日	城地選定
	10月20日	城地となる近津宮の代替検地
	10月20日	近津宮に知行10石寄進
	10月23日	近津宮仮殿他遷座、石壁、水掘出来
寛永2年(1625)	1月15日	近津宮普請始め
	1月16日	棚倉城普請始め
	3月29日	近津宮再建立成就
	5月7日	近津宮大遷宮
寛永3年(1626)	5月13日	近津宮に禁制
寛永4年(1627)	正月10日	白河へ10万石余で移封

となるであろう。寛永元年9月21日から寛永2年3月29日までの6ヶ月余で近津宮の再建を終わらせ、総掛かりで棚倉城普請に入ったといえる。しかし、近津宮本宮は移築の可能性があろう。寛永元年10月23日の近津宮仮遷座から寛永2年1月15日の近津宮普請始めの間に解体移築の時期が関係していると思われる。近津宮本宮が新築であれば、10月23日の仮遷座終了の後に棚倉城普請始めに入るに違いない。丹羽氏の馬場近津宮に対する対応を見ると〈神霊の鎮まる浄丘〉を城地としたことの配慮があり大変興味深い。

4. おわりに

丹羽氏が棚倉に就封した時、棚倉赤楯城と呼ばれており築城後は別称近津城であった。築城は大御所秀忠の命であり、短期間のうちに棚倉城の整備が完了するには、すでに要害化していた馬場近津宮神域が必要であった。また、不動院住寺の高松良篤が重要な立場にあることが判る。天正11年(1583)生まれて工事開始年は40歳余、別当職を養子良忠に譲り、自らは宮遷座、城普請、町割等奉行を兼職した。寛永4年250石取りで白河移封へも従った。棚倉城は塀、櫓等すべて土壁塗であった為、未完のまま丹羽氏が白河へ移封したと言われてきたが、当時奥州地方では土壁が主流であることは他城郭でも見られることである。そして、新土の城という表現は、すべて周囲を高土居で囲まれた土塁構えの新城であったことによる。棚倉城の特徴は丹羽氏が本丸多門圍繞の繩張を行っていることである。この問題については、あらためて棚倉城の復元的考察として検討していくことにする。